

専門委員会開催報告

専門委員会名	平成 27 年度 第 3 回「原子力アゴラ」特別専門委員会
開催日時	平成 28 年 1 月 19 日(火) 13:00~15:00
開催場所	東京大学工学部 8 号館 222 会議室
参加人数	9 名 上坂充、上塚寛、池上徹彦、横尾健、山口彰、吉村真人、藤田玲子、田中隆則、長谷川秀一(記)
議 事	<p>資料:</p> <p>資料 1: 第 3 回特別専門委員会「原子力アゴラ」議事次第</p> <p>資料 2: はじめに</p> <p>資料 3: 日本原子力学会特別専門委員会「原子力アゴラ」活動概要</p> <p>資料 4: 平成 27 年度 第 1 回原子力アゴラ議事メモ(案)</p> <p>資料 5: 平成 27 年度 第 2 回原子力アゴラ議事メモ(案)</p> <p>資料 6: 研究教育用原子炉の安全規制について</p> <p>資料 7: 我が国における研究炉等の役割について 中間報告書(案)</p> <p>議事:</p> <p>1 活動紹介</p> <p>資料 1, 2, 3 が読み上げられ、「原子力アゴラ」の活動が紹介された。</p> <p>2 議事メモ確認</p> <p>資料 4, 5 が紹介され、確認された。</p> <p>3 山口彰先生講演</p> <p>東京大学 山口彰先生から資料 6 について講演があった。以下の議論があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> • シビアアクシデント研究ができず、海外で行われている。 • 研究炉の組織体制 安全規制も重要な研究と見なされるような形にすべきである。 • 研究炉規制基準については学会としてもアウトプットを出していくべきである。 • 発電炉の前に研究炉が導入されるので、その際に大きな枠組みの安全規制が導入されるべきである。 • 研究炉・発電炉を総合した安全規制のグレードアプローチの検討が必要ではないか。 • 研究炉は当初 20 基であったが 11 基に淘汰させている。研究的にも人材育成的にもクリティカルマスに到達している。 <p>4 総合討論</p> <ul style="list-style-type: none"> • ここまでの作業は主に人材育成への影響の定量化であった。 • 今後は研究炉事業者と規制庁との公開ヒアリング記録の収集・分析を行い、研究炉の安全規制のグレードアプローチに向けた分析・データの整理が必要である。 • 並行して、欧州の情勢の調査と総括が必要である。

	<ul style="list-style-type: none">• 現研究炉が再稼働になっても、高経年対策、使用済燃料検討、10年もすると廃炉の検討が必要である。これらは事業者のレベルを超えた国の政策である。• 合理的な研究炉の安全規制のガイド・グレーデドアプローチができないと新規構築が困難である。• 上記の課題を研究専門委員会に移行して、議論することとする。 <p style="text-align: right;">以上</p>
備考	

平成 27 年 11 月 17 日

専門委員会開催報告

専門委員会名	第 2 回「原子力アゴラ」特別専門委員会
開催日時	平成27年6月30日(火) 15:00~17:30
開催場所	東京大学工学部8号館222会議室
参加人数	11名 上坂充、吉津達弘、神永雅紀、峯尾英章、奈良林直、三浦信之、吉村真人、藤田玲子、田中隆則、中島健、長谷川秀一(記)
議 事	<p>資料:</p> <p>資料1:平成27年度「原子力アゴラ」第1回委員会 資料2:「原子力アゴラ」特別委員会設立申請書 資料3:平成26年度第1回前半議事メモ 資料4:平成26年度第1回後半[第2回]議事メモ 資料5:人材育成における研究炉等の役割と早期再稼働への期待 資料6:原子力学会「人材育成に支障」実態調査へ(NHK6月24日16時33分) 資料7:原子力総合シンポジウム2015 資料8:研究炉と安全規制 KUR&KUCA</p> <p>議事:</p> <p>1 資料確認 前回と同様の資料を確認し、本日は京大炉とJAEA JMTRについてご紹介いただくことが説明された。</p> <p>2 研究炉と安全規制 KUR&KUCA 中島先生(京都大)より表題について紹介があった。苦勞しているところや Beyond DBA をどこまで考えるかなどの議論があった。</p> <p>3 JMTRの現状 神永先生(JAEA)より表題について紹介があった。地震のデータについて、東海地区との関連や研究炉審査の状況について議論があった。</p> <p>4 総合討論 以下の項目について議論があった。</p> <ul style="list-style-type: none">研究炉の審査について検討が進んでいる。すでに審査が進んでいるので、時間的な余裕はないのでいろいろな知見を蓄えていき今後役に立っていくような方向がよい。バックフィットの耐震評価などで、施工済みに後追いでチェックしているがSクラスは当然だが、BCクラスでどこまで確認すべきか。人材育成・研究で利用の側面をどのように考えるか。財政的バックアップがどのようにあるべきか。極端にならずに、今後継続的に可能で役立つような対策が必要。規制側もそれなりの方向に進んでいる。国民に対する説明責任を気にしている。

	<ul style="list-style-type: none">• 数万ページの書類が必要になっている。米国の規制は現場に沿っていて、運転を邪魔するようなことはなく、うまくいくようにしている。• 原子炉運転の経験なく卒業していく学生さんが存在している。• 過剰な機器が問題となる場合があるのではないか。• 議論の場が必要でそれがオープンになっていくべきである。• 今後の方向性をどうするか。記者会見では実態調査の話が出ている。医療(BNCT)などについても広く知らせるべき。学会で作業グループができると考えられる。 <p style="text-align: right;">以上</p>
備考	

専門委員会開催報告

専門委員会名	第 1 回「原子力アゴラ」特別専門委員会
開催日時	平成27年6月25日(木) 14:00～16:00
開催場所	日本原子力学会事務局会議室
参加人数	10名 上坂充、池上徹彦、田中隆則、関村直人、中島健、峯尾英章、村山洋二、橋爪秀利、横尾健、長谷川秀一(記)
議 事	<p>資料:</p> <p>資料1:平成27年度「原子力アゴラ」第1回委員会</p> <p>資料2:「原子力アゴラ」特別委員会設立申請書</p> <p>資料3:平成26年度第1回前半議事メモ</p> <p>資料4:平成26年度第1回後半〔第2回〕議事メモ</p> <p>資料5:人材育成における研究炉等の役割と早期再稼働への期待</p> <p>資料6:原子力学会「人材育成に支障」実態調査へ(NHK6月24日16時33分)</p> <p>資料7:原子力総合シンポジウム2015</p> <p>議事:</p> <p>1 資料確認</p> <p>資料1～7により、これまでの議論の流れが確認された。技術的な側面に集中することとした。まずは、喫緊の課題として研究用原子炉を取り上げることとした。議論のアウトプットをどこに持って行くか、今後議論が必要である。学会内での議論の状況について紹介された。</p> <p>2 JAEA研究炉の状況</p> <p>JAEAの研究炉JRR3の状況について村山部長より紹介された。その後、以下のようない点について議論された。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 新規制基準は全ての原子炉に適用されるか？ • 試験研究炉と発電炉は別だが、多くの部分が共通になっていて非常に厳しい。 • 多くの古い研究炉は満たしていない設備も多い。 • 規制側と事業者側で手探りで進めている。 • パフォーマンススペースになっている。ヒアリングは少しずつだが進んでいる。 • 新規制基準はバックフィットを要求しているが、どこまでやればよいか。 • これらをどのように活かすか • 高経年化対策のバランスが重要である。 • 審査においてどのようなことが問題になっているか？ • ガイドラインなどが無い • 重大事故はどのようなことがあるのか、など共通認識が必要 • どこまでのレベルでどのように対応するのか。その判断の根拠は？ • そもそも研究炉のハザードは何であるから小さいのか？ <p>3 その他</p>

	次回は、6月30日に東大において、京大炉、JMTR(JAEA)についてご紹介いただく予定である。 以上
備 考	